

生物多様性や癒し効果など、里山の持つ多様な価値を、我々は享受できるのである。そしてこれは、一昔前には、人々はあたりまえにやっていたことである。

そんなわけで、私は毎年、山に木を伐りに行っているのである。

窓ノコの切れ味

会津若松の五十嵐さんから求めた窓ノコで、川崎から運んできたコナラの丸太を、自宅の庭で挽いてみる。技量見極めに一応合格した自分にとっては、その使用に特に問題は無い。挽いていると、たくさんの鋸屑が、サクサクと小気味よく排出されてくる。そして予想していたより、倍以上もはやく、その丸太は切れてしまった。我が家では、積んだ体積にして、年に約5³m、生木の重さにして、およそ3トンの薪を使用しているが、その1年分の薪を切るのに、特に大変ということはない。

住宅地で、薪づくりのためにチェーンソーを使うと、その騒音で、周りから苦情が来ることもある。また、排ガスの臭いや、チェーンから飛び散るオイルも気になることがある。もっともマシーン好きの人にとっては、これがたまらない魅力でもあるわけではあるが。

それに比べて、ノコギリの音はきわめて静かである。その心地よい音は、木琴のように木と共鳴し、切り進むにつれて音程が下がっていく。風の音や鳥の声も同時に耳に入ってくる。しかし、いくら窓ノコとは言え、チェーンソーのように、またたくまに切れるわけではない。チェーンソーの5倍は時間がかかるであろうか。その間、ひたすら挽き続けることになる。

直径30cmほどもある太い木だと、最初は、目に見えてノコが入っていくが、中程になると、いくら挽いても、切り進んでいるようには見えない。胸突き八丁である。挽かなければならない長さが長いことから、当然ではあるが、効果が見えないと、さすがに辛くなる。こんなふうには、太い木をあえぎながら切っているとき、ふとあることに気付いた。この胸突き八丁のときこそ、たくさんの鋸屑が、飛び出してくるのではないか。切り始めとか終盤

のように、切り進むのが速いときは、むしろ、この鋸屑の量が少ないのである。

仕事でも研究でも、いつもその効果や成果が見えるわけではない。むしろ、それが見えるときの方が少ないとも言える。しかし、効果や成果が見えない過程は、それらが見える過程と等しく、いやそれ以上に、重要であり必要である。成果主義が声高に叫ばれ、働く人の心がすきみがちな昨今、この鋸屑の道理は、働く人の心を癒してくれる。私はノコを挽いていて辛くなったとき、この排出される鋸屑を見ることにしている。

時間がかかるといふこと

ノコを挽くといふことは、時間がかかることである。とてもチェーンソーには太刀打ちできない。隣でチェーンソーを使われると、ノコを挽くのをやめたくもなる。ノコを挽くといふことは、あくまでも自分と、そして木との対話である。